

二〇一八年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから23ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を
開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 「写真とことば」についてはずっと考えてきた。なぜなら、僕は写真評論を^{なりわい}生業としてきたために、この二つの表現の媒体に深い関わりを持たざるを得なかったからだ。

当然のことながら、同じく、あるものの代理物としてその意味を提示し、伝達し、表現する「記号」であるに関わらず、写真とことばとは相当に違った働き方をしている。そのことを、僕が知る限り最も明快に語ったのは、名編集者で、日本の報道写真家の草分けの一人でもあった名取洋之助（一九一〇～六二）だった。

名取は遺著となった『写真の読みかた』で、「記号としての文字と、記号としての写真との大きな違い」とは、「文字は実物と直接は関係ないが、写真は実物と非常に密接な関係があるということ」だと述べている。たとえば、「犬」という文字（ことば）と、「犬の写真」について考えてみることにしよう。「犬」は実際の犬とは直接的な対応関係を持たない（象形文字である漢字には多少その名残はあるが）。だからこそ、「犬」という概念は、「いぬ」でも「イヌ」でも、あるいは「dog」という英語でも伝えられるのである。

「犬の写真」の場合はどうだろう。その写真に写っているのは、それが撮影された時にそこにいた、ある特定の犬の映像である。このような直接性、具体性が、「記号」としての写真の特徴づけている。逆にいえば、『広辞苑』に載っているような「犬」という抽象概念（「ネコ目（食肉類）イヌ科の哺乳類。よく人になれ、嗅覚と聴覚が発達し云々……」）を、写真で表すことはできない。どんなに努力しても、「ポチという名前の隣の隣の飼犬」とか、「たまたま帰り道で見た野良犬」とかの、犬の具体的にリアルな映像でしか伝えることができないからである。

もう一つ、写真とことばには大きな違いがある。それは、写真は画面全体の情報を一度に伝えることができるのに対して、ことばは断片的に、順を追って記述することしかできないということだ。どんな写真でもよいが、一枚の写真に写っているものを、ことばで描写する時のことを考えてみよう。厳密に言えば、画面の隅から隅まで目を走らせるには多少の時間がかかるが、写真を

見ればほぼ一瞬のうちにその内容を理解できるだろう。

ところが、それをことばで記述しようとする、たとえば「画面の上部には空が広がり、そこには白い綿菓子のような雲が浮かび、その下には深い森と湖、湖の岸边には古い城云々……」と、きわめてまだるっこしい作業が要求される。まさに「²百聞は一見に如かず」。しかも百万言を費やしても、一枚の写真に含まれる多くの情報を、完全に描き尽くすのは無理というものだろう。ことばでは描写するその先から意味があふれ出てきてそれらをすべてすくい取るのは不可能なのだ。

このように見ると、ことばと写真の「記号」としての働き方はまるで正反対で、それらを同時に使いこなすのは難しいように思える。僕にしても、「写真評論家」として、写真をことばで解釈したり、分析したりする作業にずっと関わってきたのだが、しよせん「翻訳」以上のことはできないと考えている。文法体系の全く違う英語やフランス語を日本語に置き換えるのと同じように、写真をことばに翻訳することで、写真家たちの作品世界を分かりやすく、広く理解できるように伝えるということである。

ところが、この仕事を続けているうちに、とても奇妙なことに気づいた。写真とことばを同時に、しかも両方とも高度に練り上げられた形で使っている人たちがいるのだ。それは、他ならぬ、写真を撮影し、発表することを生業にしている写真家たちである。彼らが書いた文章を読むと、驚きとともにショックを受けることがよくある。僕などが苦労して「翻訳」してきたことばが、軽々と、しかも的確に表現されていることが多々あるのだ。

むろん、写真家の中には、撮影と制作という本来の仕事に専念して、文章をほとんど発表しない人たちもいる。しかし、僕が重要で、面白い仕事をしていると考える写真家たちは、ほとんど例外なく優れた文章の書き手でもある。これは、いったいどのようなことなのだろうか。なぜ、彼らは写真とことばという、全く異なる「記号」を、自在に使いこなすことができるのだろうか。

いろいろ考えているうちに、スポーツ競技との共通性に思い至った。これも例外はあるだろうが、³優秀なスポーツ選手は、自分の技術について、その競技の原理や特質について、きわめて雄弁に、説得力のあることばで語るることができるものだ。プロ野球のイチローや、サッカーの中田英寿の^{ひでとし}ことを思い浮かべていただければいいだろう。

彼らは（写真家もそうなのだが）、修練によって身体反応を①鍛え上げる。しかし、たとえ百万分の一秒の単位で反応する筋肉ができあがったとしても、それだけでは優れた選手にはなれない。自らの身体反応がどんな意味を生み出していくのか、競技全体の構造においていかなる位置にあるのかを、正確に判断し、認識する必要があるからだ。そして、そのような判断や認識は、ことば以外で行うのは不可能といえるだろう。

ただ、彼らのことばは空からつかみ出されたような、根拠のないものではない。それは彼らの身体の動きプレーを積み上げることで、少しずつ見出され定着していったものだ。そしてそれらのことばは選手たちがふたたびプレーする時の行動指針として生かされていく。

X

そのようなものでもある。このように身体反応とことばとの相関関係を知り尽くしていることこそ、名選手たちの素晴らしいプレーの秘密なのではないだろうか。

写真家たちも同じである。一瞬の判断が要求される撮影と制作の行為は、ことばで描写されることで、操作可能なものとして実体化される。そして彼らのことばは再び撮影と制作の行為に反映され、その有効性を試されていくのである。

とすれば、よき写真家がよき文章の書き手であるのは当然であると言える。撮影と制作の経験によってつかみとられた知恵はことばによって写真家たちを動かしていく大きな力となるのだ。

前世紀初頭、あらゆる職業、地位の人々の肖像を撮影して、「二十世紀の人間たち」という②ソウダイなプロジェクトを、独力で成し③上げようとしたドイツの写真家、アウグスト・ザンダーは、次のような④座右の銘をよく口にしていたという。

「見ること、観察すること、考えること」

この⑤カンケツな三つの動詞は、そのまま写真家にとつての写真とことばとの、緊密な関係を読み解く鍵になるだろう。「見る」だけでは身体的な反応に過ぎない。それは「観察すること」と「考えること」、すなわちことばに結びつけられることで、さらに鍛え上げられていく。そして、それがもう一度「見ること」に回帰していくことは言うまでもない。④

右の銘は、直線的ではなく、いわば循環的な構造を成しているのだ。

（飯沢 耕太郎 『写真とことば』より）

問一 〓線部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。(漢字は楷書ではっきりと書くこと。)

問二 〓線部「考えてみることにしよう」を品詞に分けたとき、その分け方として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 動詞／助詞／動詞／名詞／助詞／動詞／助動詞

イ 動詞／助詞／動詞／名詞／助動詞／動詞

ウ 動詞／助詞／形容動詞／動詞／助動詞

エ 動詞／動詞／名詞／助詞／動詞／助詞

オ 動詞／動詞／名詞／助詞／動詞

問三 〓線部1『写真とことば』についてはずっと考えてきた」について、次の問いに答えなさい。

I 「写真」と「ことば」の共通点を「〜という点」に続く形で三十五字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

II 「写真」と「ことば(文字)」はどのような点で違うのですか。本文中の言葉を使って八十字程度で説明しなさい。

問四 —— 線部2「百聞は一見に如かず」とありますが、故事成語にはこのように漢数字が用いられているものが多くあります。

次の空欄に入る適当な漢数字一字をそれぞれ答えなさい。

ア 里霧中

モ 孟母^もイ遷

ウ 面楚^そ歌

エ 紅^こ工点

問五 —— 線部3「優秀なスポーツ選手は、自分の技術について、その競技の原理や特質について、きわめて雄弁に、説得力のあることばで語ることができる」について、次の問いに答えなさい。

I 「優秀なスポーツ選手」が「雄弁に」ことばで語ることができるのはどのような能力を持っているからですか。「く能力」に続く形で本文中から六十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

II 「優秀なスポーツ選手」の「ことば」に「説得力」があるのはなぜですか。「くから」に続く形で本文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 本文中の

X

 に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ピアニストにとってのピアノ
- イ 料理人にとっての包丁やまな板
- ウ 旅人にとっての地図や磁石
- エ スポーツ選手にとってのルール
- オ 生き物にとっての空気や水

問七 ——— 線部4 「アウグスト・ザンダーの座右の銘は、直線的ではなく、いわば循環的な構造を成している」とはどういうこ

とですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「見る」という単なる身体的な反応と、対象を「観察する」という行為と、ことばによって「考える」という行為は、写真家が撮影と制作を行う際、一瞬のうちに同時に行われるものであるということ。

イ 「観察する」という行為と「考える」という行為を何度も反復することによって得られた知見は、「見る」という一瞬の身体反応のうちに写真家が撮影と制作を行うことを可能にするということ。

ウ 「考える」という行為によって写真家は対象をまずことばで認識し、それから「見る」という行為と「観察する」という行為を通じて一瞬の判断のうちに対象を選び出し、撮影と制作を行うということ。

エ 「見る」という単なる身体的な反応を経て、対象を「観察する」という行為に移り、そこから得られた知見は「考える」ということによつてことばと結びつき、再び写真家の撮影と制作に反映されるということ。

オ 「見る」という行為と「観察する」という行為は単なる身体的反応にすぎず、ことばによって「考える」という行為を通じて写真家はじめて対象を認識し、撮影と制作におよぶことができるということ。

□ 次の文章は、乃南アサの『青年のお礼』の一節である。佐渡島をドライブしていた「彼女」は、足のマメをつぶしたというヒッチハイクの青年に「二ツ亀」まで連れて行ってほしいと頼み込まれて、警戒しながらも、車に乗せる。しかし、青年は島の名所に来ると、何度も車を止めさせて見て回るなど、^{ずうずう}図々しい行動に出る。「彼女」はイライラする気持ちを抑えながらも、青年を乗せて運転を続けている。なお、文中に出てくる「賽の河原」とは、あの世とこの世のつなぎ目であり、親に先立って死んだ子どもの魂が集まるといわれる河原のことである。「二ツ亀」とはこの「賽の河原」を模した場所であり、親がかつて亡くした子供を^{くよう}供養する霊場として有名などころである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

しばらくすると、青年が口を開いた。

「あおう、この辺の人じゃないんですか」

「そうよ。旅行中なの。これはレンタカー」

「どこに行くんですか」

「私も二ツ亀よ」

「ああ、そうなんだ」

「正確には、あそこの傍^{そば}の賽の河原」

ちらりとミラーを^{のぞ}覗く。青年はぼかんとした表情のまま「はあ」と言った。

「¹ 毎年のね、恒例行事なの。こうやって、お盆の頃に来るの」

「賽の河原に？」

「ええ、そう」

「あもう、誰かに会いに、ですか」

彼女は「息子にね」と答えた。口に出して言えるようになった。それが歲月というものだと思う。

小さなあの子が病院で息を引き取ってから数年間というもの、すっかり空っぽになった心をなんとか埋めたくて、あれこれ考えた挙げ句、彼女は日本中の「賽の河原」を探して歩くことを思いついた。夫も、一緒に行こうと誘ったのだが、彼はそんな ^a 辛気臭い真似など絶対にしたくないと答えた。

「あの子はとつくに [※]成仏している。それどころか、もう新しく生まれ変わっているかもしれないじゃないか」

だが、彼女は納得できなかった。あの子が、彼女との想い出をすべて消し去って、もう他の人の懐に抱かれているところなど考えたくなかった。結局、彼女は一人で「賽の河原」を目指すことにした。そして、いくつ目かに訪れた佐渡の「賽の河原」が最も彼岸に近いような印象を受けた。以来、彼女は毎年、旧盆のこの季節に佐渡に来ている。夫は最近ではもう何も言わなくなっていた。

「じゃあ、僕と同じだ」

青年が、ぼつりと呟いた。彼女はちらりとミラーを覗いた。

「同じ？」

「僕も、会いに行くんです」

「あの、どなたに」

「家族」

家族と言っても色々だろう。父か、母か、まさか子どもということもないだろうにと考えていると、彼はまたもや車を止めてくれと言い出した。「賽の河原」を目指しているにしては、妙に道草を食いたがる。

「今、『関』って出てましたよね」

言うが早いか、また車を止めさせて、青年は素早く車を降りる。そして、ちょうど通りかかった地元の人にひよこひよこ走り寄って、しきりに何か話しかけ始めたが、数分後、意外なほどつまらなそうな表情になって戻ってきた。

「今度は何だったの」

「駄目でした。もう、いないって」

「誰が？」

「※ムジナ」

彼女は改めて身体を捻り、青年を見つめた。彼は諦めたような、半分拗ねてみえる表情で、この付近には、ムジナを祀つてある神社があるのだといった。その神社の世話をしている女性が、ムジナを自分に憑依させて、いわば口寄せのようなことをしてくれると聞いていたのだという。

「すごい長生きの、立派なムジナだっていうんだけど、口寄せをしてくれるお婆さんが病気になるって誰も世話しなくなったら、どうやらでていったらしいって」

サングラスの奥で、彼女は大きく目を見開いた。確かに佐渡は民話の宝庫、さまざまな言い伝えを持つ島ではある。だが、まさかムジナまで出てくるとは思わなかった。

「家族のこと、聞いてみたかったんだけど」

青年はがっかりした様子で呟いた。家族の何を聞きたかったのかと思う。だが、彼がそれなりに懸命に家族の誰かを思っているらしいことだけは、察することが出来た。

数分後、彼女は青年とともに車を降り、海沿いの岩場の縁に作られた歩道を歩き始めた。寒々しい風景の中で、ところどころに群生しているハマナスは花とともに真っ赤な実をつけ、すぐ傍の水田でも稲穂が顔を出し始めている。また、少し先には、緑色の草に覆われた二ツ亀が見えた。やがて周囲の岩の凹みに、可愛らしい顔立ちの五センチにも満たないくらいのお地藏さんが置かれ

ているのに気づき始める。その数が徐々に増し、やがて無数のお地藏さんが見受けられるようになって、大きな岩を回り込んだところに、いつ来ても、息をのむような、無数の地藏菩薩ぼさつと風車の並ぶ「賽の河原」があった。

ずっと彼女の後について歩いてきた青年が「ここかあ」と口を開いた。2 彼女は小さく頷うなずいただけで、サングラスを外し、目の前の風景を見つめて続けた。

ここにくると、どれほど多くの人が、我が子を亡くしているかを思い知らされる。その嘆き、悲しみ、やるせなさ、可愛らしい地藏に着せられた服やよだれかけ、風車などから感じられる。また、もしも息子がこんな場所に今も留とどまっていたままだとしたら、本当にやるせない。あまりにも淋さびしすぎ、哀れすぎるとも思う。

「ここって、親より先に死んだ子のいるところなんですかね」

『『賽の河原』 自体は、あの世に渡る手前の河原なんだろうけど』

「じゃあ、大人はいないんですかね」

「大人は——親より先に死んでいなければ、すんなり渡れるっていうことかしら」

その時、彼がすつと振り返った。その顔を見て、彼女は一瞬、青年が泣き出すのではないかと思った。彼は唇を噛かみしめ、彼女から目を逸そらすと、今度は無数の地藏菩薩が並び、風車が回り続ける風景に目をやった。

「僕は——皆、一緒にいるのかと思った」

「——皆？」

少年の面影の残る首筋の、喉仏が大きく上下するのが見えた。彼女は少しの間、躊躇ためらった後、一体、誰が亡くなったのかと聞いてみた。青年は大きく深呼吸をした。

「親父おやじと、おふくると、あと妹と弟です」

彼女は、思わず息いを呑のんだ。

「四人？ あなた以外の家族、皆なの？」

「昨年の夏に、僕以外の家族全員で親父の田舎に行く時、事故に遭ったんです。高速道路で、居眠り運転のトラックに突っ込まれて」

青年一人、友人と波乗りに行っていたために無事だったのだという。

「何か——今でも、何が起こったのか、よくわかんなくて。僕も一緒ならよかったなんてことは思わないんだけど、『なんだよ、皆して、どこ行っちゃったんだよ』って感じで」

再び、青年の喉仏が上下した。凶々しく、呑気のんきで無責任で、何を考えているかわからないように見える青年が、実はそんな悲劇に耐えている。彼女は言葉を失った。

人それぞれの苦労や悲しみは、他人と比べて判断できるものではない。一人しか喪うしなわなかったから、大勢喪つた者に比べれば「まだまし」とは、とても言えないと思う。だが彼女は、まだ一人前とは言えないうちに天涯孤独になってしまった青年の身の上を思った。少なくとも、まだやっと二十歳になるかならないかという程度にしか見えない彼には、その現実はあまりにも重すぎる。

「親父の田舎が新潟で——去年は、ついでに佐渡にでも行ってみようって、計画してたんです。結局、それも無理だったし、だから今年は皆の代わりに、僕が色んなもの、見てみようかと思っただんですけどね」

青年は努めて平静に、淡々と語っているように見えた。彼女は、何も答えることが出来なかった。たった一年では、何も整理できないのも無理はない。しかも、家族全員を喪つて、彼は今、どれほどの孤独を抱え、どんな暮らしをしているのだろうか。だが、通りすがりの彼女に、実際に力になってやれることなどあるものでもない。彼女自身が時間をかけて立ち直りつつあるように、彼もまた、自分で乗り越えていかなければならないということだ。

「皆、一緒にいるでしょう。そして、あなたのこと、見守って下さってるわ」

3 結局、ありきたりの言葉しか口に出来なかった。彼は納得しているのか分からない表情だったが、それでも彼女に、意外なほ

ど素直で真剣な眼差しを向けた。

「親子一緒に死んじゃったんだから、妹たちだけ『賽の河原』に残ってるなんてこと、ないですよね」

「あるはず、ないわ。それにきつと、もうとつくに『賽の河原』は渡り終えてる。あなたさえ心配をかけなければね。残された人間が、あまりにも悲しんでいると、それに引つ張られて、なかなか向こうに渡れないものなんですって」

4 青年は、初めて小さく微笑んだ。こうして話している間にも、ぼつり、ぼつりと観光客らしい人がきては、手を合わせたり、写真を撮ったりしていく。外見からは判断できないが、その中には必ず、愛する人を喪い、行く末を案じている人がいるはずだと思ふ。

風が、赤い風車を一斉に回す。彼女は海の方を向き、だから自分も、もうそろそろあまり死んだ息子に心配をかけないことにするのだと呟いた。

「息子さん、なんていう名前ですか」

「祐樹くん。本当なら、今年で十五になってたはずなんだけど」

青年は「十五か」と呟き、二、三歩、海に向かって歩いたと思ったら、次の瞬間、「祐樹い！」という怒鳴り声を上げた。彼女は心臓が飛び跳ねるほどの衝撃を受けた。これほどの大声で息子の名を聞いたことは、かつてなかった。

「心配するなよ、祐樹い！ 母さん元気でやってるぞお！」

青年の、ひよろりとした後ろ姿が風に吹かれている。久しぶりに涙がこみ上げてきた。見知らぬ青年が、息子に語りかけてくれることが、嬉しくてならなかった。彼は、それからも繰り返して息子の名を呼んでくれた。安心しろよ、大丈夫だ。こっちは元氣だ。そして、くるりと振り返った。

「車に乗せてもらった、お礼です」

彼女は、溢れた涙を急いでぬぐうと、改めて恥ずかしそうに笑う青年を見上げた。5 こうして近くで見れば、彼女よりずっと背

問二 ——線部1 「毎年のね、恒例行事なの。こうやって、お盆の頃に来るの」とありますが、「彼女」が「賽の河原」巡りを思いついたのはなぜですか。本文中の言葉を使って三十五字以内で説明しなさい。

問三 ——線部2 「彼女は小さく頷いただけで、サングラスを外し、目の前の風景を見つめ続けていた」とありますが、このときの「彼女」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 彼女の子どもが小さかった時のことを思い出すものに囲まれることで、子どもが死んだ瞬間の悲しい気持ちに戻っている。
- イ 子どもを思う親たちの思いを切実なものとして受け止めることで、もう一度我が子が生き返ることを強く望んでいる。
- ウ 子どもが小さかった頃のことを思い出させる服やよだれかけを見ながら、子どもと一緒にだった生活を懐かしんでいる。
- エ 賽の河原が醸し出す^{かも}わびしい雰囲気^なに直面し、息子がこんな所にいるかもしれないと思い、悲しみがこみ上げている。
- オ 無数の風車や地蔵のよだれかけなど幼い子供を思い出させる景色を見て、もう一度子どもを抱きしめたいと感じている。

問四 ——— 線部3 「結局、ありきたりの言葉しか口に出来なかった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 青年を言葉で慰めたとしても、その苦しみを軽減させることはできないだろうと突き放しているから。
- イ 子を喪った自分の心痛と比べ家族全員を喪った青年の心痛は大きすぎ、自分とは違うと感じているから。
- ウ 自分の経験から考えて、青年もいつか強く立ち直ることができるだろうと安易な確信を持っているから。
- エ 青年の重苦しい話を聞いたが、自分のことで精一杯で青年を思いやることができなくなっているから。
- オ 孤独になった彼の悲しみはわかるものの、彼が自力で乗り越えるしかないということも理解しているから。

問五 ——— 線部4 「青年は、初めて小さく微笑んだ」とありますが、これはなぜですか。その説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア こんな寂しい場所に家族がいないことを聞いて安心し、家族が早く生まれ変わることを願っているから。
- イ 弟妹だけ取り残されたりせず、家族全員が一緒にいることを「彼女」に聞いたことでほっとしたから。
- ウ 「彼女」に温かい励ましを受けたが、一人取り残された孤独感を意識し投げやりな気持ちになったから。
- エ うわべだけの「彼女」の言葉に納得できず、自分の気持ちを理解してもらおうのをあきらめたから。
- オ 「彼女」の温かい励ましの言葉を受けて完全に立ち直り、今後強く生きていくことを決心したから。
- カ 家族が自分を見守ってくれていると「彼女」に励まされ、その気持ちをありがたいと思ったから。

問六 ——線部5「こうして近くで見れば、彼女よりずっと背も高く、なかなか頼もしい好青年ではないかと思う」とありますが、

「好青年」だと「彼女」が思ったのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 初めは勝手な若者だと思っていたが、少し慰めの言葉をかけただけで、家族を亡くすという悲劇から完全に立ち直ることができた強い精神力に感心したから。

イ 初めは勝手な若者だと思っていたが、人目をはばからず大きな声で自分の息子の名前を呼ぶという大胆な行動ができることに、うらやましさを感じたから。

ウ 初めは勝手な若者だと思っていたが、自分よりも深い苦しみを味わっているのに、それに耐え、さらに自分の息子に語り掛けてくれたことがうれしかったから。

エ 初めは勝手な若者だと思っていたが、青年が真摯な態度で悲しい出来事に立ち向かい、また自分に対し思いやりに満ちた行動までとる姿に感動を覚えたから。

オ 初めは勝手な若者だと思っていたが、自分の話を真剣に聞いてくれる姿に次第に心動かされ、その優しい心に自分の息子を重ね合わせ懐かしく思ったから。

問七 ——— 線部6 「岩場のそこここにある、ほんの数センチの地藏菩薩が、互いに寄り添いながら微笑んでいるように見えた」

とありますが、これは何を象徴的にあらわした表現だと考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア この場所に集まっている既に亡くなった人の魂が、前を向いて人生を歩もうとしている二人を祝福している様子。
- イ この場所に集まっている既に亡くなった人の魂が、死者のことを強く思いすぎて動けない二人を哀れんでいる様子。
- ウ この場所に集まっている既に亡くなった人の魂が、死者のことを完全に忘れ、解放された二人を応援している様子。
- エ この場所に集まっている既に亡くなった人の魂が、家族の死にうろたえている二人を落ち着かせようとしている様子。
- オ この場所に集まっている既に亡くなった人の魂が、お互いに恋心を抱こうとしている二人を見守ろうとしている様子。

問八 この小説の内容や表現の特徴についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 見知らぬもの同士が偶然の出会いによって知り合い、対照的な人生へと足を踏み出していくさまを、佐渡の奥深い文化的風土を背景にして効果的に語っている。

イ 物語の舞台を賽の河原という暗く宗教的な場所に設定し、身近な人間の死を通して人間の本質を描き出すことで、登場人物の救いのない現状を語っている。

ウ 軽妙でテンポのよい会話を中心とした手法で肉親の死という登場人物にとつての重苦しい現実を描くことで、爽やかで明るい物語世界を作ること成功している。

エ 家族を喪ったばかりで自分を見失っている青年と、家族を喪った悲しみから立ち直った彼女との対比を通して、時の流れの大切さを印象づけている。

オ 長く苦しい心の旅を経てきた主人公が、青年と心を通わせることで次第に前向きに変化していく様子を、彼女の視点を通してたくみに表現している。

〔三〕 次の古文は『徒然草』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

1 ※さがみのかみとまかり相模守時頼の母は、松下禅尼ぜんにとぞ申しける。 ※ 守を入ることありけるに、すすけたる明り障子の破れを、禅尼手づから、小刀して a 切りまはしつづつ張りければ、兄の ※じやうのすけよしかけ城介義景、その日の ※けいめいしたりけるが、「たまはりて、 ※なにがし男に張りかへさせん。 b さやうのことに心得たる者なり」と申しければ、「その男、 2尼が細工によもまさらじ」とて、一間づつ張りけるを、義景、「皆を張りかへんには、はるかにたやすからん。まだらに張りたるは見苦しきことかな」と重ねて申しければ、「尼も、後は ※さはさはと 3張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざと 4かくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけんためなり」と申しける。いとありがたかりけり。

注 ※ 相模守時頼：鎌倉幕府の五代執権であつた北条時頼のこと。

※ 守を入ること：時頼が実家に帰ること。

※ 城介義景：松下禅尼の兄である安達義景。

※ けいめいし：準備をし。

※ なにがし男：だれそれという男。

※ さはさはと：すっきりと。

問一 線部 a 「切りまはしつづつ」、b 「さやう」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 ── 線部1 「相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける」に用いられている「ぞ……ける」というような関係を何の法則と言いますか。答えなさい。

問三 ── 線部2 「尼が細工によもまさらじ」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 私の作業には決してかなわないだろう
- イ 私の作業にはきつと注目しないだろう
- ウ 私の作業にまさか口出しできないだろう
- エ 私がこの作業に加わるとは思わないだろう
- オ 私がこの作業をしたとは気づかないだろう

問四 ── 線部3 「張りかへんと思へども」を現代語訳しなさい。

問五 ── 線部4 「かくてあるべきなり」とは「こうしておくのがよいのだ」という意味ですが、「こうして」とは具体的にどうすることですか。説明しなさい。

問六 次の会話は、『徒然草』について自主学習をしている信子さんと愛子さんの会話です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

信子 『徒然草』について図書館に行つて調べてみたら、著者は（Ⅰ）という人で、この文章の後には「世を

治むる道、（Ⅱ）を本とす」という一文があつたよ。

愛子 そうなんだ。じゃあ、禅尼は（Ⅲ）に自分の張り替えた障子を見せることで、（Ⅱ）の大切さを伝えようとしたのかな。

信子 私もそう思った。（Ⅰ）は、禅尼の言葉を通して、読者である私たちにも（Ⅱ）の大切さを伝えているんだと思うよ。

愛子 『徒然草』は鎌倉時代に書かれた随筆だけど、今の世の中にも通じるようなことが書かれているよね。私もこの話を読んで、自分の普段の生活の中で何ができるか考えてみたよ。例えば、（Ⅳ）ことを心がけようと思う。

信子 古文を読むことで、今の生活を見直すきっかけにもなるよね。他にもいろんな古文を読んでみたいな。

Ⅰ（Ⅰ）に当てはまる人名を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 兼好法師

イ 清少納言

ウ 松尾芭蕉

エ 平清盛

オ 聖徳太子

Ⅱ (Ⅱ) に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自立 イ 奉仕 ウ 時間 エ 儉約 オ 学問

Ⅲ (Ⅲ) に当てはまる言葉を古文の中から抜き出しなさい。

Ⅳ (Ⅳ) に入る内容を自由に考えて答えなさい。

問一 ① きたえ ② 壮大 ③ 遂げ ④ ぎゆうのめい ⑤ 簡潔

問二 ア

I あるものの
ゝ号
ー
である
という点。

問三 II

い	片	と	の	写
と	的	ば	情	真
い	に	一	報	は
う	順	文	を	実
点	を	字	一	物
。	追	一	度	と
	っ	は	に	密
	て	実	伝	接
	記	物	え	な
述	と	る	関	
す	直	こ	係	
る	接	と	を	
こ	は	が	持	
と	関	で	ち	
し	係	き	、	
か	な	る	画	
で	く	が	面	
き	、	、	全	
な	断	こ	体	

問四 ア 五
イ 三
ウ 四
エ 一

問五 II
I 自らの身体
II 身体反応と
ゝ
く
し
て
い
る
から。
I 認識する能力。

問六 ウ
問七 エ

問一 a ウ
b ア

問二

な	息
ん	子
と	が
か	死
埋	ん
め	で
た	、
か	す
っ	っ
た	か
か	り
ら	空
。	っ
	ぽ
	に
	な
	っ
	た
	心
	を

問三 エ
問四 オ
問五 イ
カ

問六 エ
問七 ア
問八 オ

問一 a きりまわしっつ
b さよう
問二 係り結び
の法則

問三 ア
問四 張り替えようと思うけれども

問五 障子の破れているところだけを張り替えること。

問六 I ア
II エ
III 相模守時頼

問六 IV (例) 使わない部屋の電気は消す ・ 顔を洗うときは水を出しっぱなしにしない
こと